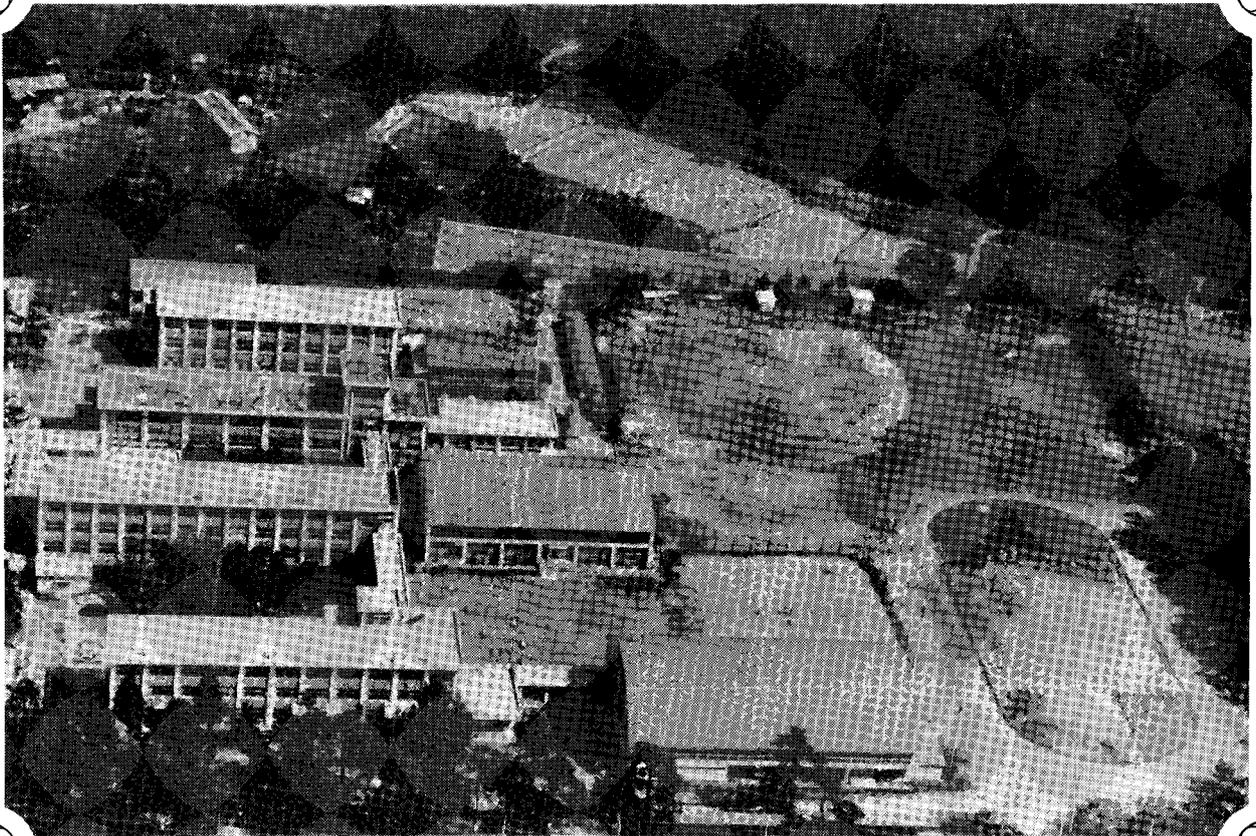


# (仮題) 臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

秋季号

62. 11. 1



---

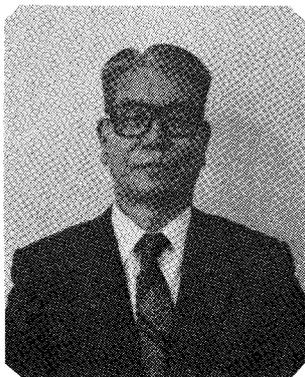
## 昭和62年度秋季号目次

会報第2号をお届けします	支部長 佐伯益一	1
62年度 東京支部大会盛大に開催		2
同窓会本部総会		3
クラス会だより		4
大切なこと	学校長 法性昇	5
臥龍が丘の先輩たち	松尾吉信	6
故郷忘じがたく候	吉田松二郎	7
漢字試験の思い出	佐伯益一	9
東京歴史散歩・越後村松藩	佐藤久	10
お知らせ		12



# 会報第2号をお届けします

東京支部長 佐伯 益一



本年度6月27日の大会に於て、初の試みとしてテレホンカードと会報第1号を配布した処、自画自賛ではないが大変好評でした。是非続投するようにと励ましの声が多く、それではと云うことで8月来第2号の編集を始め、ようやく秋季号をお手許に届ける事が出来ました。御協力を願った方々、原稿を寄せられた方々に厚く御礼を申し上げます。特に表紙を飾る新校舎全景の写真には母校の酒井先生に大変お世話になりました。

会報発行の件に関しては創刊号にも述べたと思いますが、在京同窓各位に凡ゆる情報を提供すると共に、過ぎた青春の日の思い出を偲び、友情、親睦へのきずなし同窓会本来の目的に寄与することにあると信じています。

“とにもかくにもやってみよう。”と云うことで創刊号、第2号が出来た事でもあり、今後も皆さんに可愛がって頂きたいと思えます。仮題“臥龍が丘は緑なり。”としてあるように、校舎の周囲が四季を通じて緑であり、何時までも若々しく風雪にも耐えて行こう、前進あるのみだとの意を込めてあります。信号だって“進め。”はミドリです。

然し乍らこれはあくまでも仮の題であり、皆さんの総意によって新しい名前が決まるまで、又はこれで宜しいと言うまで“仮題。”のままでゆこうと思えます。皆さんの御意見が寄せられることを期待しています。

同時に皆さんのまわりのニュース、寄稿等何でもよいから送って頂きたいと思えます。

この前先輩、後輩から村松で発行されている“村松万葉。”なる書物の恵送にあずかり、読ませて頂いたが仲々立派な内容で編集装幀とも見事な出来栄でありました。知人も多く執筆しており懐しく何度も読み返しましたが、“なるほどこれだな。”と強く感じました。当支部の会報も之に劣らず立派なものにしたいと思えます。今回はとりあえず300部刷りましたが年2回、新年、大会時と発行を予定しております。経費もかかる事と思えますが、是非各位の協力を頂き、皆さんから喜ばれる会報に育てあげたいと念じています。

とりとめない文章になってしまいましたが、何卒、意のある処をお汲み取り願いたいと思えます。



# 62年度 東京支部大会 盛大に開催

本年度の東京支部大会は6月27日午後3時半より高輪泉岳寺近くの日本鋼管高輪クラブで約100名出席の上立食形式により盛大に開催された。

午後2時頃から続々と参集した出席者は受付にて記念品(テレホンカード)会報創刊号名簿を受取り、定刻には会場はほぼ満員の状態となった。

大会は総合司会、吉田松幹事、司会、八木・深見両幹事によって進められ、先ず中村幹事の経過報告、佐伯支部長より本日の大会出席者への御礼、協力者に対する御礼を始め8項目に亘る謝辞の後、同窓会発展のため全力を傾注する、私の云いたい事は会報の中で述べてある故よく読んで頂きたいと力強い挨拶があり、次いで茂野会長より、創立80周年を迎える準備が着々と進んでいる旨の挨拶、法性学校長より生徒は可愛いもの、大切にしなければならぬとの挨拶があり、川瀬五郎氏の開宴挨拶、最長老長野武夫氏(旧中3回大正7年卒)の乾杯音頭によって、懇親会は始まった。

会場を埋めた同窓生があちこちで輪になり久しぶりの再会を喜び、近況を語りあい、会場を目まぐるしく立廻る支部長、幹事の人達も応待に大重わであった。特別出

演の東蒲三川村出身のキングレコード専属歌手新川ひろみさんのアトラクション頃から会場は大いに盛り上がり、カラオケが始まり、抽選会では出席者各自が持ち寄った賞品が山程並び“越の寒梅”を始め高級ウイスキー、其の他の賞品が夫々当選者に渡され、喜ぶ人、口惜しがる人、で更に又興を添えた。大団樂の終りは校歌、応援歌の大合唱があり、佐伯支部長の手締めで幕を閉じたが近來にない大盛況であった。全員、出席した事を喜び、又の再会を誓いあい午後6時半閉会した。

尚当日の出席者状況は次の通りである。

案内状発送総数	835名
転居先不明、戻	26名
欠席	316名
返事無し	398名
死亡	2名
出席	93名

(内訳:旧中 32, 旧女 7, 高男 38, 高女 16)

来賓は、茂野敏郎同窓会長(旧中17)、(村松町長)、法性昇学校長、山本(中27)、大塚(高2)、酒井(高5)諸先生



最長老の長野武夫氏による乾杯音頭



本部長・学校長との歓談

ありがとうございました

一寄 付一

本年度支部大会開催に当り、支部経費の不足を補うため一部同窓各位に浄財の御寄付をお願い致しました処、多くの方から深い御理解を頂き、おかげをもって大会を

円滑盛大に終了することが出来ました。厚く御礼申し上げます。御寄付をよせられた方々は下記の通りで、御礼の気持としてテレホンカードを送らせて頂きました。

(※( )内は口数、1口5千円)、敬称略。(支部長佐伯(10) 見方謙策、(6) 中村倉吉、佐伯益一、伊藤

# 同窓会本部総会

8月17日 於村松

昭和62年度の母校同窓会総会は8月17日、午後4時より村松町、“明月”にて開催された。出席者は会長、学校長他約70名で、東京支部からは佐伯支部長、中村幹事が出席した。会長、校長のあいさつのあと議事に入ったが、議事内容は次の通りである。

## 1. 昭和61年度決算報告（承認）

収入決算額 847,766円  
支出決算額 396,020円  
差引残額 451,746円（次年度繰越）

## 2. 昭和62年度予算案（承認）

収入支出予算額 999,246円  
（会議費、補助費、連絡費、各10万円）  
（旅費、7万円、雑費、予備費他63万円）  
収入は卒業生1人当り2,000円の入会費（273人）と繰越金が大部分である。

## 3. 同窓会館建設について

学校側の希望として創立80周年を記念し、赤山側にある同窓会用地に生徒の活動の場としての同窓会館を作るという計画で、昨年10名の企画委員会が出来た。

5K×10Kの鉄骨2階建てで宿泊設備を設ける構想である。予算は3,500万円、全部募金によって賅う方針であるが、計画が大まかであるため理事会では意見続出、もう少し時間をかけて検討することとなった。

## 4. 同窓会員名簿発行について

創立80周年を記念して、コンピューター導入システムによる名簿を発行する事となり、日本名簿出版

会社に業務を委託する事になった。完成まで18ヶ月かかるのとこと去年3月頃現在の名簿によって問合せ、照会等のハガキが行くだろうとの学校の話である。創立80周年時（昭和66年）には卒業生総数は18,000人位になるだろうとの見込みである。

午後6時より懇親会に入り、冒頭、茂野会長の挨拶の中で東京支部の活動に対する称賛の辞があり、続いて佐伯支部長より過日の支部大会に会長、学校長、諸先生が出席された事へのお礼、久し振りに同窓各位にお会い出来て誠に愉快な心境である旨の挨拶のあと、東京支部の現況について説明、特にテレホンカード、会報、88年手帳等の発行については出席者の驚嘆を浴び、東京支部への認識を新たにすると共に持参のテレホンカードが忽ち50数枚も売れるというありさまであった。懇親会は旧友相集い和気あいあいの内に進み、最後は恒例の校歌、応援歌の大合唱で総会の幕を閉じた。続いて有志による二次会が“木村”で開かれ、支部の2名が招待された。



同窓会、懇親会

勇五、塚田 勝、（4）水尾正二、水尾広吉、堀哲二、石黒四郎、（2）川瀬五郎、渡辺文男、大橋文夫、二平 昌、亀嶋 謙、吉田松二郎、板垣文平、吉田公男、熊倉 悟、芳賀健一、中村雅明、加藤三代太、大橋玉枝、岡本和子、佐久間英輔、大橋貞夫、

長沢友次郎、新保ミワ、（1）横山信夫、千代国一、山口甚三郎、山崎正男 金子 宏、村田泰次郎、藤田 勇、丸山一夫、佐野善吾、茂野宏一、佐久間二郎、西山壮平、斎藤朝之、松尾 貢、小林早月、篠川恒夫、関 孝世、八木又一郎、深見洋子、堀 直昭

## クラス会だより

### 旧中第27回生クラス会

旧中学校の第27回生（昭和17年卒）の本年度クラス会は10月4日（日）午後1時半より西新宿のセンチュリーハイアットホテルで、その階数もゆかりの27階で開催された。

東京在住者8名、郷土村松新潟方面より馳せ参じた者12名、合せて20名、久闊を叙し乍ら変貌する東京を眺望しての賑やかなクラス会であった。午後4時会場の都合により散会したが一人として帰る者無く、隣りの三井ビル47階に席を移し二次会。今度は夜景を楽しみながら故郷を論じ、人を想い、興ずること又2時間、東京支部のテレホンカードと支部発行の88年度マンスリースケジュール手帳を土産に、来年度の再会を誓いあった。来年度のクラス会は秋頃、津川在住者が幹事となり、きりん山温泉で開くことが万場一致で決定した。

後日、たくさんのお礼の通知を頂いたが、代表的な礼状を御紹介する。

（代表幹事 佐伯、会場幹事 吉田、会計幹事 中野、幹事 西山、熊倉）

□ □ □

“先日はご苦勞様でした、お陰様で楽しい一日を過ごさせてもらいました。大変化した新宿の高層ビルで数々の料理、郷土の酒までそろえての設営、みんなの元気な顔—顔。とにかく後味のいい集いでした。感謝、感謝、代表幹事以下各幹事に敬意を表します。併せて在京の各位にもよろしく。

（五十嵐喜作・新潟日報取締役）

□ □ □

此の度は数々の写真、御恵贈いただき誠に有難う御座いました。先ず以て厚く御礼申しあげます。在京幹事の皆さんのお骨おりにて実に楽しい一刻を過ごさせていただいた点深く感謝いたします。新宿の高層ビルのド真中で少年の昔に帰って懐しい応援歌を高唱した思い出は終生忘れ得ぬ人生の一頁となることと信じて疑いません。

皆さんにお会いしての私の総じての感想は夫々が非常に潑刺として「若い」ということでした。お話によれば大部分の方が第二の人生を歩んで居られ、現役は数少い

とのことでしたが、夫々の生き甲斐を求めて有意義に生きて居られることが察せられ、好い刺戟となりました。これからは何と言っても健康第一だと思います。お互い健康に留意して長生き致しましょう。ほんとに今回は有難うございました。後略

（二平一男。 越後天然ガス取締役）

### 旧中第33回生クラス会

旧中学校最後の卒業生（旧中33回、新制高1回）のクラス会が10月10日（土）新潟県、湯田上温泉若竹旅館で午後6時から一泊の予定で開催された。出席者は62名で東京からの出席は13名。学校からは恩師の小笠原、権瓶両先生が出席され盛大な会合であった。

翌日は全旅館のマイクロバスで慈光寺参詣後母校を訪問し、記念撮影のあと解散した。この会は3年毎に開かれ、今回は村松が幹事で、五泉、新津、津川、東京が廻り持ちで幹事を勤めており、毎回極めて盛況であるとの事である。

（東京支部会員からは伊藤勇五、芳賀健一、斎藤和男、関八十一、中村雅明氏等他が出席。）

### 旧高女26回生クラス会

旧制女学校最後の卒業クラスである第26回（昭23年）生のクラス会が10月23日、宮城県鳴子温泉、鳴子ビューホテルで開かれた。

卒業時84名のクラスから出席する人31名で40%近くの出席であった。今回は村松が幹事で村松からは蒲原鉄道のマイクロバスで20名が参加、関東、東京方面からは伊藤（鈴木）千恵子、望月（田沢）美智子、高田（佐々木）順、石井（松井）、洋子他7人の皆さんが参加、東京支部より出席が優秀であると幹事を喜ばせた。

会は盛況であり、短い一夜をダンス等で興じ、翌日は観光地巡りで東北の秋色を楽しんだ。この会は毎年2回、開かれており活動は仲々活発である。40%の出席率にまさに驚異であり、次の会合のニュースが楽しみである。

## 大切なこと



学校長 法 性 昇

赤レンガの校門や校庭の老松が無言の教を垂れ、多くの同窓生が見守り、激励してくれています。

この様な立派な学校に学ぶ先生、生徒は幸せであり、誇りを持っています。

学校は生徒も先生も、生き生きしていなければなりません。学校は厳しい所であり、また楽しい所です。厳しさの中にこそ、優しさがあると思います。

先月末、学校をやめたいと云っている生徒と、二人で話しました。

本人は学校へ来たいし、ご両親も高校を卒業させたいのです。話しているうちに、目が輝き表情が明るくなりました。いだいている不安が除かれ、明るい希望と自信を持ったからです。不安や恐れを感じると消極的になり、その人の持つ能力は隠されてしまいます。それを除いてやるのが、大人の責任であり、プロたる先生の大変な仕事だと思います。

生徒は、それぞれ立派な能力を持っています。お互いに力を合わせて、それを伸ばし、発揮させるよう努めねばなりません。

今日、高校は義務教育だと考える方が適切です。中学校との違いは、生徒及び保護者に学校の選択の自由があることです。

本校は強い人のみの集りでなく、いろいろの人がいてこそ、成り立つのです。弱い人や、人に劣ると感じている人こそ、学校にとり貴重な存在です

時には、保護者も先生も共に苦しみながら、お子さんより学んでいくことが大切かと思えます。

そして卒業の時に、「村松高校で学んで良かった」と心の底から思えるように、職員一同努力いたします。

皆様方のご協力を、お願い致します。

(62.7.17発行P.T.Aだよりから)

### “ 予告 ” かんろく会

来る11月14日、午後5時半より、渋谷区宇田川町“日本料理、銀亭”で高校3回卒のかんろく会クラス会を開

催す。今回は女子が幹事で約30名出席の予定で、連絡は、白石キヨさんまで。



阿賀野川ラインの景勝地

62年9月改築落成

きりん山温泉

ホテル 福 泉

磐越西線・津川駅・鹿瀬駅。下車バス10分  
電話 02549-2-3131  
(東蒲原郡鹿瀬町鹿瀬)

## 臥龍が丘の先輩たち

松 尾 吉 信

私が昭和10年4月に入学した県立村松中学校は、5年制の男子校で各学年2学級、在籍生徒数約400名（内、1学年は100名）であった。

登下校に巻脚絆着用の規定は前からあったが、この年度に県下に先駆けて、通学鞆が「背のう」になったのも、「国民皆兵」、しかも日中戦争直前という、当時をよく物語る。

普通教科のほか教練と武道が必修で、教練には年1回の査閲があり、武道では、厳寒期に10日間の寒稽古が始業前に課せられた。

このように、軍国的色彩は濃かったが、他はほぼ正常な体制で教育が行われ、こんな頃私達は、遅々たる春日の下、臥龍が丘の学び舎に入学の喜びに浸り、希望に胸をふくらませた。

当時、時代が然らしめたのであったが、校内生活はすべて規律正しく、整々としていて、1年生から見る上級生は、見るからに落ち着いて堂々としており、ほとんど大人に近かった。休憩時にも、学習や読書に余念のない人が多く、中には思索にふける様子の人も見られた。図書室で借りる本も、私達の借りるものと、上級生のそれとは全く異なっていた。

やがて、私達が毎日の生活に一通り慣れた頃、応援リーダーの指導による応援練習が始まったが、気迫に満ちたリーダーの指揮に従って展開される上級生の応援ぶりは、私達が息をのむほど見事で、私達新生に「松城健児」の誇りと自覚を、大いに促した。

学校に慣れるにつれ、平素格別目立たない人が、模擬試験で全校の首位を占めたり、運動で注目された人が、全校生徒を魅了する弁論を奮ったり、感動を誘う書画や文芸作品を発表する人など、多彩な上級生がいて、畏敬の思いを深くした。実際、1年の頃の学友会誌『臥龍』に載った数篇の文は、これが中学生の筆に成るものかと、驚いた記憶が今もなお鮮やかなほど、すばらしい文章であった。

このような上級生と接する機会が多くなるにつれて、有形無形の得がたいものを上級生から与えられたことは、幸せであった。

確かに上級生達は、総べてにおいて私達の模範であり、兄貴と呼ぶにふさわしい貫禄があって、これが当時の校風の基盤を為す要素の一つであったように思われる。

私は柔道部に入部したが、柔道部には実行力のある、重厚なタイプの上級生が多かった。一見怖そうでも、強い人ほど下級生に思いやりがあることも程なく知り、皆がかなり辛いという部生活も、さほど苦にならなかった。

練習後に、ふと洩らした私の勉強の悩みを親身に聞いて、自分の体験を通じての指導をしてもらったMさんに、以来兄のような親しみを持った。後年、海軍兵学校に進まれたMさんから、海兵受験をしきりに勧められたが、私は体格検査に自信がなく、受験をあきらめた。

この先輩、故海軍中佐、村川弘さんは、昭和20年2月21日、神風特攻隊第二御盾隊長として硫黄島沖の米軍機動部隊に突入、空母「ビスマークシー」を撃沈、戦死された。

私は、冬期間スキー部にも所属したが、この部の2人の先輩から、集中勉強を学んだほか、覇気と忍耐力とをかなり鍛えられた。

江花国吉、笠原正敏のこの両先輩は、共に運動技能抜群の、温厚な垂範型の上級生として部員から尊敬された先輩で、海軍甲種飛行予科練習生第一期生に合格、後に海軍きっての名パイロットとして百里原、舞鶴各航空隊教官を勤められたが、江花さんは太平洋戦争で戦死、笠原さんは戦後間もなく病死された。

私は教員在職中に、松中時代の上級生と下級生の縁から、特に親しく、かつ厳しく指導を頂いた方が数名あり、これも同窓生なればこそと、いつも感謝したものである。

顧みれば、臥龍が丘の学び舎と、数多くの先輩や、机を並べた級友達の面影が次々と脳裏に浮かび母校に寄せる思いを年ごとに深くするこのごろである。

※ この記述は「村松万葉」第二集に掲載されたもので、特に、ご本人の承諾を得て転載したものであります。

筆者略歴 (旧中第25回, 昭和15年卒)

1. 旧川内村出身, 現在, 村松町新町に居住

2. 旧新潟高校卒業, 京都大学農学部在学中陸軍に現役入営, 中退

3. 村松町立愛宕中学校教諭を最後に57年, 定年退職

4. 59年より3年間母校講師

5. 村松町柔道連盟(会長:笠原昇先生)会長代理

## 故郷忘じがたく候



吉田松二郎

他はないようである。

そんな五泉言葉のいくつかを紹介したい。

「五泉のガンはどう言うガン, 空飛ぶ雁はなんて言うガン」2・26事件のあった頃であるから, 昭和11~12年頃であろう。新津の女学校に通っていた従姉が帰宅すると「今日もからかわれたわ」と、よく話していた。隣り町でも, 日常つかっている言葉に, こんなにちがいが見られる。

新幹線時代の今では考えられないことであるが, 私達が受験の為上京する頃は, 夜行列車にゆられて8時間かかって, 漸く上野に辿りついた。かくして東京に住みついて, 約半世紀になる。初めの頃は, イとエが反対だと東京者に笑われ, “東京, 東京と云ったって, 8割は田舎の人じゃないか”, と見当ちがいな突張りを言ったりしたが, 人生も黄昏れてくると, そう言ったこともどうでもよくなり, 逆に回帰本能が増すようになる。

ましてやキョウビは, テレビ言葉の氾濫で日本語の乱れ方が激しい。舌をかむような若者のことばはさておいて, 「只今留守ですがTELナンバーをメモって, コールバックしましょう」なんてビジネスマンの日常語がこの有様である。

古い言葉にこそ, 正統な日本語の継承がみられると云うべきであろう。

今年久しぶりに五泉に帰った「刈入れを終えた田圃にいなごを追いかけて, 見あげる空にアキアカネが群れとぶ……」期待していたこんな風景はどこにも残っていなかった。大切に心に暖めていた昔の故郷はすっかり様変わりしていて, 耳に残る方言に, わずかに昔の故郷を偲ぶ

1. ませながる…日本語でうまく説明がつかない時, 外国語の単語の中にぴたりの表現の言葉があるものであるが, ませながるだけは説明の言葉に窮する。単に欲張りだけでなく, 人をだしめく気配やら, 独占したい野望やらがちらちらしている混じったミートソースである。

2. ままなく…食べるの意味であるが, 単に言葉の中での使い方のみならず, 手足のはこびなどままならぬ時, 「手がままなく」などの表現をする。

3. しょうし (SHOSHI)=恥しいの意味である。笑止千万の笑止あたりが語源であろうか。静謐な城下町村松と, 交通の要衝地新津との中間に在って, 商業都市として, 積極活発, 気風も粗い五泉にしては, 「おしよしでございます」などのもの言いは, おくゆかしくも又, 品よいものではないか。

4. のめしこく…怠けると云う意味である。なんとなく牛がどたりと寝そべっている姿が想像できる。もっと細かく分析すると, 怠けプラス横着である。

5. はじける…お節介をやく, でしゃばるの意味である。

熟した豌豆がパチンとはじけるような、活発なエネルギーと、嫌われても嫌われてもなお突進するタフさがうかがえる。

6. かたぎを悪くする…へまをやってバツが悪く恥ずかしい。知人にあわせる顔がない、と云うことで、人目をさけて、こそこそするさまを云う。

最後に古いお話を致します。

私が海軍予備学生の頃、一期上の学生が課程を終了して、教官として私の隊に赴任して来た。その中の1人、W少尉は亀田町の出身で、彼は新潟師範を卒業してすぐ海軍に入ったから、彼の常用語は即ち亀田の言葉である。ある日、航法の講義の時間に某学生の返答がよく聞きとれなかった。W少尉は決然と立ち上って、“音が小さい”と叱りつけた。

亀田でも五泉でも、音は声と同義語に使われていた。然し一般世間ではそれは通用しない。学生はみなキョト

ンとしている。中には何か落ちて来たのかと天井をみあげる慌て者もいる。彼は更に一段と声をはげまして“音が小さい!!”

不得要領のままその時間は終了した。やがて夜の帷がおりて、消灯ラップも間近の頃、もう彼に渾名がついていた。「オト」である。

後年、同期生会で、私が「音」即ち「声」の解説をして、全員納得、々々。40年を経て初めて「音」の意味を諒解したのである。

故郷忘じがたし、方言こそわが故郷である。

- 日本ボウリング場協会理事
- 千葉県プロボウラーズ連盟会長
- 神風特別攻撃隊魁会代表幹事
- 綜研グループチーフインストラクター
- 旧中23回 早大卒

### コトブキドライセンター

株式会社 寿

代表取締役 中村 倉吉  
(旧中第22回卒 五泉出身)

〒108 東京都港区高輪2-1-24  
TEL 03(445)6501-2

### 永幸産業株式会社

代表取締役 伊藤 勇五  
(昭和23年旧中33回卒 鹿瀬町)

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-16-8  
TEL (03)770-3291

建設機材総合商社

関東資材株式会社

代表取締役 佐久間 英輔  
(高校第6回卒 五泉出身)

本社 〒323 栃木県小山市駅南町6-22-3  
TEL 0285-27-1931(代)  
宇都宮営業所 〒320 宇都宮市江曾島1-9-3  
TEL 0286-58-6181(代)

各社アイスクリーム  
冷凍食品・清涼飲料卸

有限会社 越後食品

代表取締役 石黒 四郎  
(高9回卒)

会社 東京都世田谷区岡本1-28-20  
TEL 417-5110(代)  
自宅 東京都狛江市岩戸南2-14-14  
TEL 488-2117

## 漢字試験の思い出

いつ頃から始まったのか判らぬが、私が旧制中学へ入学（昭和12年）した頃、毎週月曜日に全校で漢字の書きとり試験があった。黄色の表紙のうすい常用漢字表という小辞典があって、1年から5年まで同じ試験が行われ通学の車中などで一生懸命勉強したものだ。出題は5問で毎週先生方が交替で出題される。そして翌日その結果が発表される。さすが上位は高学年が占めていたが、あとで答案用紙が返されその裏が真っ黒になるまで練習させられた。これは社会に出てから随分と役に立った。国漢を担当されていた齋藤勝先生から“この試験は今、諸君にとって苦痛であろうが将来上級校に進学したり社会に出た時、必ず役に立つ筈だ、他人に先き立つ事が出来る、”と言われた事がある。正にその通りであった。その言葉を今でも私は忘れないでいる。おかげで書きものをする時、誤字、脱字に気をつけるようになり、社員や他の人の書いた書類を見ても文章や文字の誤りをすぐ見つける事が出来るようになった。漢字にはそれ自体に意味があるものだ。従って当節の限られた当用漢字とかには私は大反対なのである。

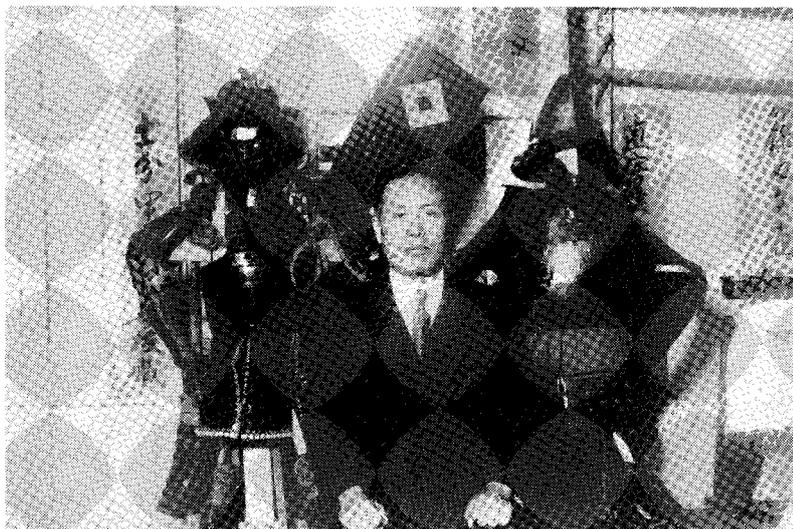
佐 伯 益 一

齋藤先生は昭和53年3月3日84歳で亡くなられたが、学校時代はいつも色のあせたような背広を着ておられた、それでようかんという仇名がついていた、これは御本人も承知しておられたがあるいは良寛様のようかんであったかも知れぬ。仲々の人格者で今でも懐しく思い出す恩師の一人である。

先生は昭和6年4月に新潟中学から赴任して来られ17年3月に千葉縣市川中学、京城工業へ転任された。

写真は御息の朝之氏（旧中28回卒、藤岡市に居住）から寄せられたもので創立30周年の頃の撮影のものである。背後に村松藩藩祖の堀直奇公の着用していたものと思われる鎧（左側）と直筆が見える。

旧 中 27 回 卒  
芝浦工大土木工学科卒  
元県立図書館運営委員  
東蒲連合青年団長  
日東道路欄工事部長



## 東京歴史散歩

村松の人々の足跡

佐藤久

◎ 東京の中の村松ゆかりの地を知る人は案外に少ない。ここで述べるのは堀（奥田）家に関連した個所を、管見の中で識してみる。

### 1. 上野公園

西郷さんの銅像も黒門跡も、かつては堀家の屋敷の跡に建ったと言ったら驚かれるであろう。上野寛永寺が造営された寛永4年（1627）迄、上野の山は忍ヶ岡といって、津軽越中寺、藤堂和泉寺、堀丹後守の邸宅のあったところである。即ち東京都文化会館・芸術院・精養軒・清水堂などは堀家の跡地に建てられたものである。駅の公園口前に建つ文化会館は凌雲院の跡地に建てられたものである。

私も昭和20年代・上京すると、西郷さんの銅像裏手にあった直奇公の墓に詣でる事を日程に加えていた。またここに野瀬右近・馬場武左衛門・林坊兵衛の殉死した人々も合葬されている。直奇公の大円球状の墓は昭和30年に渋谷の長泉寺に移された。

公園に残る遺物は、寛永8年（1631）堀直奇の寄進した大仏の顔だけである。この大仏も、いく度となく災難をうけ、顔の部分のみが残って丹後仏として、精養軒前の小丘にまつられている。

### 2. 丹前風呂

堀丹後守の屋敷前にあった湯女風呂のことである。堀直奇は忍ヶ岡（上野公園）より、神田須田町と神田小川町の境附近に屋敷を与えられた。その附近に現今いう「ソープ」即ち湯女風呂があって、そこに出入する遊野郎が好んで用いた衣装を、丹後守前ということ『丹前』と称した。当時の伊達姿である。

今日では堀丹後守を知らなくても『丹前』の名は、日本人の間では定着している。

### 3. 駒込抱屋敷

現在の駒込吉祥寺のところにあった、堀直奇の下屋敷

である。紫衣事件で山形県の上ノ山の流されていた、沢庵禅師が堀直奇や柳生宗矩のとりもちで許され、この抱屋敷に数年暮らした。また直奇もこの屋敷で没した。いま吉祥寺山門をくぐって、左手に鎮座する大仏を丹後仏ともいう。

### 4. 村松藩上屋敷跡

地下鉄銀座線の末広町駅から地上に出ると、上野広小路から神田方面に走る中央通りと、蔵前通りが交叉する。その角にあるガソリンスタンドが屋敷跡である。東西約43間、南北72間で約1町歩あった。この前の上野に行く道は、将軍家が寛永寺に詣でられる道で、お成り道と称され、堀家屋敷角に『御成り番所』がおかれ、常時村松藩士が詰めていた。

### 5. 村松藩下屋敷跡

江東区亀戸3丁目にあった。藩政時代、柳島抱屋敷または下屋敷と称され、主に江戸勤番の藩士が起居した。元禄年中、堀直利のときに与えられたもので約2町歩あった。

### 6. 長泉寺

渋谷区神宮前にある。原宿から環状5号線を右に折れ、渋谷方向にすすむと右手に京セラ本社が見える。この一寸先に長泉寺がある。この寺には昭和30年に上野の凌雲院にあった、堀丹後守直奇の大円球状の墓と、直奇の従五位下の木像がある。

### 7. 華徳院

杉並区松ノ木にある。華徳院殿芳居浄香大居士・堀直時を中興開基とする。寺名も直時のそれによる。昭和30年迄、ここに全長2メートル余の堀直時の墓があったが、奥田直秋氏よりいづれかに移され現在不明である。境内には堀家ゆかりの人々の墓がある。

地下鉄荻窪線の新高円寺駅下車数分のところにある。

◎ 越後村松藩の成立

村松堀家（3万石）は、村上城主堀丹波守直奇（10万石）の次男堀丹後守直時を始祖とする。直時は寛永9年に2万石を与えられ、堀大膳政治（直奇の従弟）と堀玄蕃直常（げんぼん）を与力として家をたてた。寛永16年6月堀直奇が死んで孫の千助直定（せんすけ）があとをついだ。

同年10月、村上藩は直奇の遺言によって、10万石をかさあげして13万石として、3万石を直時に与えた。下田、七谷、見付、安田、笹岡である。

寛永9年3月、千助直定が早世したので村上堀家は断絶した。幕府は堀直時に村上在番を命じたので、直時は7月、日光廻りで越後入りをした。

笹岡（北蒲原郡）の大肝煎・惣兵衛及び肝煎・理兵衛方を宿所とした。村上には3階屋理兵衛方を宿所とし、8月には信州廻りで江戸に帰った。

近時、直時・直吉の代に『安田藩』が成立したとの説があるが、当時の安田とは城地として適地であったであろうか。安田の資料よりさぐってみよう。

正徳2年（1712）8月（村鑑）

古城 壱ヶ所

村上周防様御代 吉成右近殿知行七千石二丁与力 廿騎御預り御城代ノ由、城破落仕候ハ九十年余罷成り候

宝暦11年（1761）5月（巡見使文書）

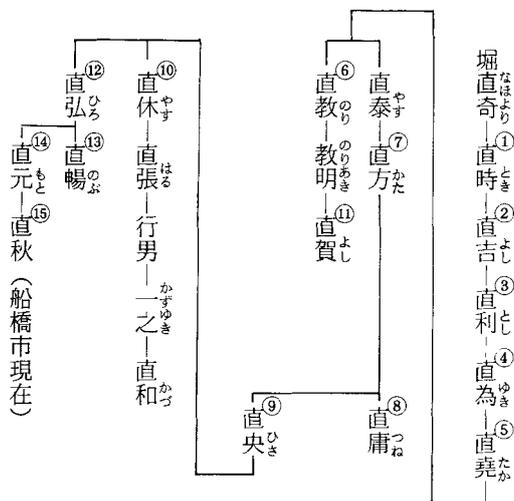
落城之儀ハ141年程、城地不残御年貢地ニ相成候

この他に天保8年6月、文化3年5月、慶応4年4月の記録も同様である。従って安田城の廃城は『越後野志』の元和8年（1622）を下限と考えてよいのではないか。

直時の城地が安田であるならば、宿所を安田と何故にしなかったか。村松に残る村上以来の旧臣の資料には全て『笹に下る』、『笹岡に下る』とある。

当時笹岡には村上源五・今井源右エ門が慶長3年（1598）まで在城し、その遺構も残っている。『安田藩』が成立したと唱える人々は、『直吉公御直筆の写』にある『正保甲申 五月五日安田ト村松替』とあるからとか、寛政重修諸家譜や徳川実紀によるとしている。諸家譜や実紀は、正保元年より数えて150年～200年後に記述されたものである。藩翰譜は関ヶ原の戦から延宝8年（1680）までを新井白石が、元禄15年（1702）に上呈されたものであるが、ここでは「丹後守藤原直時、故丹波守直奇の二男父が卒せし時其取領を分ちたもう、越後村松之地三万石 開発の田なりにや」とある。

以上安田藩成立の疑問点をあげてみた。ともあれ正保元年（1644）5月5日、堀直吉は村松に入封してきた。すなわち正保元年5月5日より越後村松藩は廃藩置県までつづくのである。



筆者紹介

筆者の佐藤久氏は現在村松町城町に居住されており郷土史の研究者として著名である。現在、村松町史編纂委員、村松文化財審議委員、村松町史料調査会代表を務めており、又松城会幹事でもある。

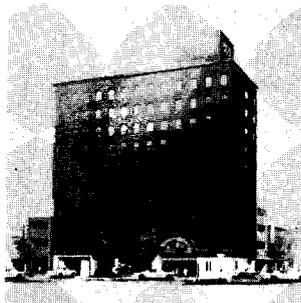
今回、本会報に掲載するに当り堀家末裔である堀直昭氏（高8回卒支部幹事）を煩らわして執筆を依頼したもので全五編から成る。

当号には二編掲載したが以後各号に連載の予定である。尚、詳しく知りたい方は直接、電話するなり、又書状を以て問合せしてみるのが良いと思う。（但し御当人が迷惑でなければ）

電 0250-58-6063

当支部として筆者の佐藤氏に甚深なる感謝と敬意を表する次第である。

# ビジネスに 2つのヴィラ

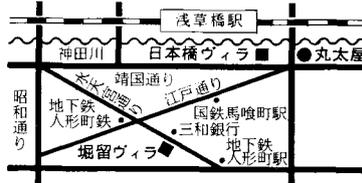


● 電話 (〇三) 六六八一〇八四〇  
東京都中央区日本橋馬喰町二一―一  
● 日本橋ヴィラ



● 電話 (〇三) 六六四一〇八四〇  
東京都中央区日本橋堀留  
一―一〇一―一〇  
● 堀留ヴィラ

● シングル 6,500円より (税・サービス料込)



BUSINESS HOTEL **ヴィラ**

丸太屋株式会社

代表取締役副社長 塚 田 勝

(高8回卒)

〒103 東京都中央区東日本橋2-26-8

電 話 03-862-0681

自 宅 浦和市原山4-23-12

## “ お 知 ら せ ”

10月16日、支部幹事会を開催、支部長以下12名出席、  
下記事項を決定致しましたのでお知らせ致します。

1. 支部会員会費を年額3,000円とし昭和63年2月末  
まで62年度分を収めて頂く。会計年度は4月1日よ  
り翌年3月31日迄とする。
2. 会報の発行は年2回とし、毎年正月期と大会開催  
期とする。

3. 昭和63年度支部大会を6月11日(土)“ホテル高  
輪”で開催する。
4. 特別会員制度を設け、遠隔地に居る同窓、同級生  
に連絡をとり特別会員に勧誘する。
5. 至急支部会員名簿を整備する。

以 上

昭和62年11月 第 2 号

編集・発行人 : 新潟県立村松高等学校同窓会東京支部  
吉 田 松 二 郎

事務局 〒108 東京都港区高輪2-1-24

TEL 03-445-6501

郵便振替 (東京2-136445)